

(様式6-2)

研究成果概要

所属学校名 いなべ市立大安中学校
職・名前 教諭・柳川 真紀

- 1 事業の名称 特別支援教育内地留学
- 2 留学先の名称 三重大学 教育学部
- 3 研究主題 「気になる生徒」の理解と校内支援について
(1)中学校の実態調査を通して見える支援の視点
(2)応用行動分析の視点から

4 研究成果の概要

(1)中学校の実態調査を通して見える支援の視点

中学校の教師に対して「気になる生徒」の実態調査を行った。まず、一公立中学校の教師全員が中学校現場で、配慮や指導が必要であると感じる生徒の特徴についての具体像を自由記述したものを、太田、石田の報告を参考に、KJ法で分類して比較した。その結果、規則不適合、不適切行動、多動、感情不制御、友人関係不適合、消極、孤立の他に「学習面での心配」と「基本的な生活習慣が気になる」の特徴が追加された。更に、記載された記述内容を検討し、生徒指導の視点、特別支援教育の視点、両方の視点の3つの視点に分類し、次に気になる生徒の人数と生徒の特徴についての実態調査を行った。その結果、学習面で心配な生徒の人数が多く、教師が挙げた気になる生徒の半分以上を占めた。学年別の特徴として不適切行動生徒の割合が、中学2年生で最も多く出た、生徒指導上の問題行動であっても、生徒の行動の背景を探っていく必要がある。以上の結果より、中学校では、特別支援教育、生徒指導の両方を総合させた視点が必要である。発達の問題や行動・情緒の問題が複雑に絡んで、最も表面化しやすい時期と捉え、その行動背景を探り、適切な支援や介入を行うことが重要である。

(2)応用行動分析の視点から

「気になる生徒」の授業中の行動問題を探るため、ビデオ観察を通して機能的アセスメントを実施し、授業中に出現した行動の背景より、生徒理解や支援について応用行動分析の視点から考察した。先の研究(上記)より、不適切行動が最も多いという結果が出た中学2年生の担任・副担任が、授業中の行動面で気になると挙げた通常学級籍の2名を観察対象者とし、2014年9月に該当生徒の在籍する学級の授業(数学・国語・理科 3時間ずつ)の直接観察とビデオ観察を行い、出現した不適切行動の機能(具体物・注目・逃避・感覚)のアセスメントを行った。その結果、どの授業も様々な機能がランダムに出現したが、不適切行動の出現が少なかった国語の時間に注目したところ、「具体物」「注目」機能を持つ不適切行動が「感覚」へと変化し、授業の終盤には不適切行動の出現が、両生徒ともなくなっていた。教師のタイミングのよい自然な注目や声掛けが、両生徒の不適切行動が適切な行動に変化する先行事象となり、適切な行動の後には教師が笑顔でほめて評価をしていたことも確認できた。授業展開の中で、適切な行動を増やす工夫や強化子が設定されていたことが、両生徒の適切な行動の増加につながったと考えられる。このように、行動に注目した視点は、発達障害の有無に関わらず、教師間で交流する意義があり、校内委員会をはじめ、研修会の場でも生徒理解や支援の手だてを考える手がかりとなるであろう。